

翻訳語とコノテーションの諸相

—異文化理解の視点から—

児玉千晶

キーワード 詩語、コノテーション、翻訳語、カタカナ語、擬似外来語

1、はじめに

原語から対象言語へ言葉を置き換える作業を一つの翻訳と称するならば、原語と翻訳語の間における言葉の等価は、どこまで可能であろうか。言葉の指す対象物が明白な場合は、二言語間で共通の認識を持つ語への変換も可能であろうが、たとえば詩学に用いられる詩的言語のように、言語としての「伝達」の役割とともに「意味作用」が伴っている場合は、翻訳語での等価はきわめて難しくなる。言語はそれを表現・伝達的手段として用いている共同体の文化を自らの構造に反映する象徴体系であり、それが表現・伝達のもっとも重要な媒体となされることによって、それをを用いる人たちの思考と行動の様式までを特定の方向に規制しうるものである。¹この視点に立つと、言葉は背景にその言語を使用する共同体の文化を担い、対象言語もまたその言語を用いる共同体の文化を反映しているため、翻訳によって等価な言葉へ置き換えることは、厳密には不可能であると言えるだろう。

文化や風土が異なると、詩歌において同一の主題を扱ってもどのような違いが生じるのか、原語と翻訳語にどのような意味のずれが生じるのか。また、翻訳語において漢字表記とカタカナ表記では意味作用に違いがあるのか否か。それらを言葉のもつコノテーションを中心に例証し、差異を考察するのが本稿の目的である。

2、歳時記（季語）におけるコノテーション

2-1、和歌における「秋の夕暮」

日本文化を担った詩語の良い例として、歳時記における季語が挙げられる。歳時記とは「季語と、文化的に固定されたその含意と、そしてその季語を用い

た代表的な作品例とを列挙したもので、(中略) 辞書としてみた場合、歳時記は
いわば、日常言語の一段上のレベルで精密に組織化された詩的言語で(言い換
えれば、日常言語が伝統詩歌の中で自動的、排他的に帯びることになる含意)
の専用辞書」²である。

ここで「自動的、排他的に帯びることになる含意」とは、大まかに言うなら「デ
ノテーション」(表示義)に対する「コノテーション」(共示義)を指している。
³(厳密にはこれら二つの用語の輪郭が明確ではない⁴) 一方はいわゆる「文字
どおり」の意味、他方はそれ以外の意味というのがもっとも簡単な区別である。
グローバル化の進んだ現代社会では風土・季節感が希薄になり、無季の詩歌も
多くみられるが、古典作品を読み解く場合、季語の持つコノテーションの理解
は不可欠であろう。

たとえば、以下に挙げた古今和歌集の「三夕」は秋の夕暮れを詠っているが、
どれも「寂しい」「もの悲しい」情景を表している。すでに万葉の時代から、秋
の夕暮れを主題とした場合、おのずと幾ばくか寂寥の情緒を伴っていたが、そ
もそも「悲秋」の発想は中国に由来している。中国では主として三国六朝時代
に類型として定着した「悲愁」の主題があり、中国の漢詩文の影響から「悲愁」
の発想が日本の勅撰漢詩集に取り入れられ、やがて和歌の世界にも広まって
人々の意識に留まるようになった。⁵秋の夕暮れには「寂しい」「もの悲しい」
風情があるという一つの通念が定着するようになり、日本での「秋の夕暮」が
持つコノテーションとして一般化していった。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ	藤原定家
心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ澤の秋の夕暮	西行法師
さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮	寂蓮法師

では、秋の夕暮れを他の国ではどのように捉えているだろうか。
オーストリア人の詩人トラークル (Georg Trakl : 1887-1914) による「浄めら
れし秋」の一節を見てみよう。

Verklärter Herbst

Georg Trakl

浄められし秋

ゲオルク・トラークル

Gewaltig endet so das Jahr	ちからづよく、こうして年は終る
Mit goldnem Wein und Frucht der Gärten	金色の葡萄と園の稔りをともなって。
Rund schweigen Wälder wunderbar	あたりの森はふかしぎにおし黙り

Und sind des Einsamen Gefährten. 孤独な者の伴侶となる。

Da sagt der Landmann:Es ist gut. そのときの農夫は言う—これでよし。
 Ihr Abendglocken lang und leise おまえらの晩鐘はながくしずかに
 Gebt noch zum Ende frohen Mut. ひびき終えてなお、はれやかな気持ちを与え
 Ein Vogelzug grüßt auf der Reise. 旅ゆく鳥の列があいさつをよこす。⁶
 (後略)

「晩鐘」という語により、この詩が夕暮れの風景を詠んでいるのは明らかであるが、そこに一抹の「哀しさ」もない。あるのは、画家ミレーの描く絵のような、豊穡で穏やかな静謐さである。言葉のもつコノテーションが文化や風土によって、それぞれ全く異なっていることがよく分かる。

2-2、「雨」をめぐる表現

歳時記には、「春雨」「五月雨」「梅雨」「時雨」「驟雨」「霧雨」など雨を表現した季語が多く見られる。それらを英語のrainと比較して「(英語には)季節の違いや降り方による雨の細かい様相に対応した表現が見当たらない」⁷という論もあるが、果たしてそうであろうか。季語が古くから俳句の中で用いられてきた詩語であることを考えると、この比較は不十分であり適切ではない。英語の詩の中で雨がどう表現されているかを見る必要があるだろう。

We die,	我等も時尽き
As your hours do, and dry	死して枯れ
Away	果つ、
Like to the summer's rain;	ただ夏の日の雨滴に同じ。
	(ロバート・ヘリック『水仙へ』より)

Here begynneth the Book of the Tale of Caunterbury

カンタベリ物語の書ここに始まる

Whan that Aprill with his shoures soote 季節は四月、優しい雨がしとしとと、
 The droghte of March hath perced to the roote 三月乾きの根っ子まで染み透り
 (ジェフリー・チョーサー『カンタベリ物語』の冒頭部分より)⁸

All night the sound had	夜どおしその音は
come back again,	行つては戻ってきたが、

and again falls
this quiet, persistent rain.

いまもまた
この静かなしつこい雨が降っている。
(ロバート・クリーリー『雨』より)

And now a gusty shower wraps
The grimy scraps
Of withered leaves about your feet
And newspapers from vacant lots;

それから吹き降りのにわか雨に、
煤まみれの枯葉のくずや、
空き地からきた新聞紙が
しつこく足にまといつく。

(T・S・エリオット『J・アルフレッド・プルーロックの恋歌』より)⁹

「春雨」「五月雨」「梅雨」「時雨」「驟雨」「霧雨」は言うなれば、「春の雨」「五月の雨」「梅の実のなる頃の雨」「一時的な雨」「走り去るような雨」「霧のような雨」というように形容詞の内包された詩語である。それらと全く等価の英語表現を見つけるのは難しいとしても、上記のように「夏の雨」¹⁰「四月の優しい雨」¹¹「静かでしつこい雨」「吹き降りのにわか雨」など、雨の細かい様子を表した表現は英語においても数多く見受けられる。

ただし、たとえば日本語と英語のどちらもが「夏の雨」(summer rain)と表していても、湿度の低いヨーロッパに降る夏の雨は、またたく間に乾いて消えてしまう儂さの象徴として描かれており、湿度の高い日本に降る雨とは趣もイメージも異なっている。翻訳の目的を「言葉の等価」とするならば、文化や風土が違えば言葉の持つ意味内容や表現も異なり、基本的に翻訳は不可能なものと言えるだろう。

昨今、「写俳」という写真と俳句が一体になった表現形式が一般化している。たった17文字による俳句の世界を豊かにさせてきたのは、季語のもつコノテーションに負うところが大きかった。しかし地域や文化、世代によって共有できるコノテーションに限界が生じはじめ、それを埋めて補うものとしての役割が「写俳」の写真にはあるように思われる。

2-3、スウェーデン詩歌における「落葉」

詩語におけるコノテーションは文化や言語によって様々である。たとえばスウェーデンの詩歌では、広葉樹の「木の葉」を表わす語 (löv) が「秋の落葉」を暗黙の内に示している場合が多い。¹²落葉の色といえば黄色であり、日本では「紅葉」という字のごとく赤色の葉を思い浮かべるのとは異なっている。(日本では童謡の「もみじ」なども人々に「秋の葉」＝「紅い葉」という意識を与えていると思われる。)

北欧の秋は長く厳しい冬の始まりである。雪や寒さに閉ざされた冬はあたたかも「棺桶」の中のようにあり、秋の落葉は人々にとって「死」のイメージと強く結びついている。以下のダーゲルマンの詩はそれをよく表している。「落葉」が「死」と結びつき、落ち葉は亡き骸のイメージを持つことが分かると、ヘルガ・ハーレ (Helga Härle) の俳句の意味もより鮮明になる。また、シャティス・ベリクイスト (Cattis Bergquist) の句の場合は、「落ちたばかりの葉」に亡くなったばかりの骸のイメージを重ね合わせると、雨はまるで親の死を知らずに語りかけている幼子のように受け止めることもでき、句としての奥行きと理解が増す。日本人にとって、「秋の夕暮」が悲哀や寂寥のイメージを与えるとしても、秋が「死」のイメージに結びつくことは少ないであろう。¹³

Höst

Stig Dagerman

Hur fort blir lönnarna gula,
Som lyser vår vandrin i parken.
Att dö är att resa en smula
Från grenen till fasta marken.

(中略)

Hur snart står popplarna höga
Och nakna med svärta i strecken.
Att dö är helt enkelt att snöga
Som löv i den muntra bäcken.

(後略)

I offerstenen
en handful
gulande björklöv
(Helga Härle)

一握り黄葉を捧ぐ石の上

Regnets smattrande
på de nyfallna löven

秋

スティグ・ダーゲルマン

楓の葉はまたたく間に色づいて
公園を散歩する私たちを照らしている
死とは一片が小枝から大地へ
舞い落ちていく旅のこと

ポプラの樹々はあっという間に伸びて
黒い縞模様のような裸の幹を高くする
死とはさらさら流れる小川へ
落ち葉のようにただ雪が降り注ぐこと

捧げ石に
一掴みの
黄ばんだ白樺の葉を

ぱらぱらと雨が鳴る
落ちたばかりの葉の上に

inget att förstå

何も知らずに

(Cattis Bergquist)

黄落や無邪気にばらばら雨の鳴る

3、翻訳語のコノテーション

言葉の持つコノテーションが文化や風土により異なることを例証してきたが、ではさらに、同一言語における翻訳語の表記の差から意味作用の違いが生じるかどうかを見ていく。 “wine”、「葡萄酒」、「ワイン」を例として、原語、漢語訳、カタカナ語訳のコノテーションを示すと次のようになる。

3-1、“wine” のコノテーション

英語でvineはぶどうの木を意味する。果実はgrape、実を圧搾し、果汁を発酵させて作ったのがwineである。wineという語の背景に、ぶどうの木と実を連想することは容易である。イギリス人研究者のピーター・ミルワード (Peter Milward) によれば、ぶどうの実を大きな樽や石の酒舟に入れ、人々が踏んで圧搾し酒造する様子を寒冷地のイギリスで目にすることはほとんどないが、南ヨーロッパからの情報および聖書の知識から、wineという語はそれらの情景を人々の心に呼び起こす。聖書における最後の晩餐で、キリストがwineを「私の血」であると語った後に、磔に架けられ復活したことから、キリストを記念する意味でwineは教会の聖餐式にも用いられる。¹⁵ぶどうの学名はVitis、「結ぶ」という意味であり、樹そのものが他物にからみつくことを指すが、聖書ヨハネ15章ではキリストは自らを「まことのぶどうの木」¹⁶と語っている。またwineは、ヘブル語でヤイン (ギリシャ語でオイノス)、ティーローシュ、ホーメツと発酵状態によって別の呼び名があり、ヤインは旧約聖書だけで141回も出てくる。英語におけるwineはキリスト教と深く結びついており、恩寵、霊力、喜びのイメージがあると言えるだろう。

3-2、「葡萄酒」のコノテーション

表記によって「葡萄から作られた酒」ということが容易に分かる。wineの訳語として「葡萄酒」が最も頻繁に用いられている書物は、「パンと葡萄酒」という成句で有名なように、やはり聖書であろう。そのためか、落ち着いた古めかしい響きとともに、人々の生活に密着した酒というイメージがある。しかし、

キリストの血の象徴としてキリスト教との関連を強くイメージさせることは一般的に少ない。

高見順の詩、「葡萄に種子があるように」は、葡萄と葡萄酒を念頭に置いて書かれた詩である。葡萄を人の心に、種子を悲しみに、そして葡萄が葡萄酒になることを人としての成熟の喜びに喩えている。この詩ではキリスト教との結びつきはまったく感じられない。

葡萄に種子があるように

高見 順

葡萄に種子があるように

私の胸に悲しみがある

青い葡萄が

酒に成るように

私の胸の悲しみよ

喜びに成れ¹⁷

3-3、「ワイン」のコノテーション

「ワイン」はwineの音をカタカナ表記した語であり、葡萄から作られた酒というよりは、西欧の食事で一般的に飲まれている酒というイメージの方が強い。おしゃれで、高級なイメージもある。日本酒にはない赤ワインの色が日本人にとって印象的なのか、「ワインレッド」「ワインカラー」と言えば濃い赤紫色を指している。一昔前のTVコマーシャルで「夫婦でワイン」というキャッチフレーズがあったように、優雅で楽しく明るい語らしいの場を連想させる。

4、まとめ

原語“wine”の持つ、キリスト教に連なる認識とイメージは翻訳語になると薄れて、「葡萄酒」は葡萄から作られた酒であること、「ワイン」は舶来の（さらには「高級（上等）」「おしゃれ」な）酒であることを強く意識させる。原語と翻訳語との間でコノテーションに違いがあり、さらに、どの翻訳語を用いるかによって同じ物に対するイメージに違いが生じている。言語の実用的な「伝達機能」だけを考えたならば、翻訳語の「葡萄酒」と「ワイン」はどちらか一方があれば、それで十分であろう。しかし言語には、それ自身自立的で価値あ

るものとして注目の対象となるような使われ方、すなわち「詩的機能」¹⁸もある。その視点に立つと、「葡萄酒」と「ワイン」はそれぞれ別々の「詩的機能」を担っているため、どちらにも存在意義があることになる。

明治初期より欧米を手本とし、欧米に学ぶことで近代化を図ってきた日本人にとって、外来のものは皆、自国のものより技術の進んだ、時代の先端をいく上等で洗練されたものとして受けとめられてきた。そのため翻訳語としてのカタカナ語には「舶来（外来）」「上質（高級）」「おしゃれ（時代の先端）」という通念化されたイメージがあった。こうしたイメージは、翻訳語としてのカタカナ語に限らず、外来語と誤認されそうなカタカナ表記の言葉全般にも生じ得る。

1950年代、「トヨタ」「ミヨシ」「スバル」「キララ」のように企業の会社名が和語からカタカナ表記に変わったのは全体の一割程度であったが、その後1970年代には「グンゼ」、「ユニチカ」等、1980年代に「ワコール」、「セーレン」、「クラレ」等、1990年代には「テザック」、「ダイドーリミテッド」等、2000年には「ゴールドウィン」「レナウン」「ワールド」「デザート」「ダーバン」等、そして2004年には半数以上の社名がカタカナ語を用いるまでになっている。1878年－1915年までのほとんどの会社名が漢字表記であり、使用されている語種は漢語のみ、あるいは漢語と和語の混種語で、カタカナ語はすべて外来語にのみ使用されていた。ところが1970年代になるとカタカナ語のみの社名も出現し、さらに外来語以外の語種をカタカナ表記する新しい傾向が始まった。¹⁹こうした変遷は、事業内容の多様性や企業の海外進出を意識しての戦略であると同時に、外来語に似せることによって外来語のもつイメージを利用したものと考えられる。

メディアや企業は外来語のもつ好イメージを利用するために、外来語に似せた<擬似外来語>を数多く生み出していった。そのことでカタカナ語のイメージはさらに一般化されてきたと思われる。ただし、こうしたカタカナ表記の語に対する通念は、その言葉の指す実体への認識が高まるにつれ、消失していくと考えられる。

たとえば「コップ」は本来、カタカナ表記の外来語だが、すでに人々にとって身近な言葉であり、その実体は誰にも明白である。そのため、翻訳語としてのカタカナ語にありがちな「特別なもの」というイメージがない。しかし「タンブラー」と言えば、仮にコップの一種とまでは分かって、いまひとつ実体が掴めない人が多いはずである。そのため「タンブラー」は「舶来（外来）」「上質（高級）」「おしゃれ（時代の先端）」なものと認識され易い。つまり、「実体が掴めない（掴み難い）」＝「特別なもの（身近なものとは違う）」＝

[外来][高級][時代の先端]という図式になっていると考えられる。カタカナの翻訳語及び<擬似外来語>は、ともに[実体が掴めない(掴み難い)]という性質から、言葉ごとのコノテーションではなく、カタカナの翻訳語及び<擬似外来語>という集合体に共通した、特有の通念が生じてきたと言えるであろう。

最後に、本稿では文学における翻訳を題材とし、論旨の前提を簡略化するために、翻訳を原語から対象言語への言葉の置き換えとするならば理論的に翻訳による言葉の等価は不可能であると定義したが、20世紀半ばより翻訳論は原文志向から訳文志向へ、等価志向から機能志向へ、言語のコード変換から異文化コミュニケーションへと変遷しつつある。翻訳には様々な分野があり、それぞれの目的に応じて一つの起点テキスト(Source Text=ST)から幾通りもの異なる目標テキスト(Target Text=TT)への翻訳が可能であると考えられるようになってきた。「正解」の翻訳があるのではなく、それぞれの状況に応じて翻訳は流動的に変わるという機能的翻訳理論の立場から、翻訳は異文化コミュニケーション行為として捉えられている。²⁰

言語間におけるコノテーションの差異が原文理解と翻訳の大きな障害になっていることは確かだが、コノテーションの多くは民族性及び国民性、風土、社会、文化、習慣等に由来しているため、コノテーション理解はそのまま異文化理解とコミュニケーションに結びついていく。完全な翻訳は理論的に不可能であろうとも、異文化理解の手だてとして翻訳は今後も大きな役割を担っていくことであろう。

注

- 1 池上嘉彦(1983)『詩学と文化記号論』筑摩書房p.4
- 2 川本皓嗣(1994)「伝統のなかの短詩型」『歌と詩の系譜』中央公論社 p.249
- 3 池上嘉彦(1983) p.40

「例えばroseという語で<ばら>でなく、<愛>とか<恋>といった内容を表したとする。もしroseという語を<ばら>を指して使うのであれば、これは普通の言語レベルでの用法である。/rouz/という音形(またはr-o-s-eという綴り)が表現面(「記号表現」)を構成し、これに<ばら>という意味(「記号内容」、この場合「表示義」)が結びついて両者でroseという言語を構成しているわけである。ところが、roseという語で<愛>や<恋>ということを表したとすると、この際の表現面(「記号表現」)はroseという語(言

語記号として、すでに上述のような音形ないし綴りと意味によって構成されている)であり、これが<愛>なり<恋>という意味(「記号内容」、この場合は「共示義」)を担って、両者で一つのより高次の記号を構成しているわけである。」

- 4 川本皓嗣(1991)『日本詩歌の伝統—七と五の詩学—』岩波書店p.5-7
「ロラン・バルトの定義のひとつによれば、「コノテーションとは、あるテキストを書くのに用いられた言語に関する辞書にも、また文法にもない意味である」。しかし、その場合の問題のひとつは、辞書にはなくても多くの人間が暗黙のうちに認めている意味と、個々の人間が付け加えるまったく個人的な意味との違いを、どう扱うかにある。(中略)

フランスの言語学者アンドレ・マルチネは、普遍的意味に対する個人的意味、客観的意味に対する主観的意味としてコノテーションをとらえているが、それに従えば、辞書にある通りの狐はデノテーション、狐に対する各人の好悪その他の反応はコノテーションということになって、狡猾な狐という通念の行き場がなくなる。

しかもバルト自身の認めるとおり、辞書の中身も時と場合のよって千差万別である。(中略)

そうしたあいまいさがどこまでもつきまとうにせよ、結局のところ、「狡猾な狐」といったたぐいの意味は、伝統のなかで通念化され、固定化されたコノテーション、あるいはすべての辞書に記載されるだけの普遍性に達していないデノテーションとして、どちらかにひきつけて説明する他ないだろう。」

- 5 川本皓嗣(1991)『日本詩歌の伝統—七と五の詩学—』岩波書店 p.23-29

「この発想は、その源をたどれば、遠く戦国時代の末に揚子江の中流域、楚の地方に起こった。・・やがて漢代から魏晋六朝の時代に流行した辞賦などに受け継がれ、・・秋の悲哀をとりわけしみじみと感じさせる時刻として、とくに夕暮や夜が注目され、・・「秋懐」、「感秋」、「秋意」、「秋夕」といった詩題が、そうした悲哀感を抱き込む形で定石化した。・・そしてこの風潮は、そのまま日本にも伝わった。(略)『後撰集』から『千載集』にかけての六つの勅撰集の時代は、「秋夕」というテーマの可能性が徐々に認識されるとともに、そこに含まれるコノテーションが、悲哀寂寥の感情一本にしぼられていく過程であるといつてよい。」

- 6 生野幸吉・楡山哲彦編(1993)『ドイツ名詩選』岩波書店p.259
7 滝川桂子(1995)「言語の背景—翻訳における違和感」名古屋文理短期大学

- 紀要第20号p.146
- 8 東中稜代・小泉博一編 (2000)『イギリス詩を学ぶ人のために』世界思想社 p.15, 43
 - 9 亀井俊介・川本皓嗣編 (1993)『アメリカ名詩選』岩波書店 p.289, 213
 - 10 the summer's rain : ロバート・ヘリックは17世紀のイギリスの詩人。「夏の雨」はまたたく間に消えてしまう儂いものの喩えとしてここでは用いられている。
 - 11 Aprill with his shoures soote : ジェフリー。チョーサーは14世紀のイギリスの詩人。
Sooteは「甘い、優しい」の中英語。
 - 12 『俳句集 変容』(Haiku Förvandlingar Dikter i urval av Svenska Haiku Sällskapet ISBN :91-975268-0-0 Östasieninstitutet 2004
に収められている339句のうち12句にlövが用いられ、そのうちの8句は「落葉」を意味している。
 - 13 児玉千晶 (2007)「スウェーデンにおける俳句受容」『北ヨーロッパ研究 第四巻』p.39
 - 14 *Älsklingsdikten*(2000)Brombergs Bokförlag AB Samt Resp.Upphovsman
ISBN :91-7608-810-3 p.35 児玉千晶訳
 - 15 カトリックでは白葡萄酒、プロテスタントでは赤葡萄酒を用いる。赤葡萄酒が血に似ているから「私の血」であると語ったのではなく、人々の生きる糧として一般的な飲み物であったからである。
 - 16 わたしはまことのぶどうの木であり、私の父は農夫です。(ヨハネによる福音書15-1)
「純良種の良いぶどう」(エレミア書二章)にたとえられたイスラエルは、そのままでは未完成な予型にすぎず、まことのぶどうの木であるイエス・キリストにおける完成を目指していた。
 - 17 高見順 (1977)『高見順詩集』現代詩文庫 思潮社 p.21
 - 18 池上嘉彦 (1982)『ことばの詩学』岩波書店 p.19
 - 19 加藤早苗 (2005)「日本における会社名の変遷に関する考察—カタカナ語使用を中心に—」岐阜聖徳学園大学国語国文学 Vol.24
 - 20 藤禱文子 (2007)『翻訳行為と異文化コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相』
松籟社 フェアメーアのスコポス理論(「目的」=“Skopos”)とライスのテキストタイプ別理論について述べられており、TTとSTの差異を言語体系の差、文化の差、コミュニケーション状況という3つの観点から考察し、

論証している。

参考文献

- 池上嘉彦『ことばの詩学』岩波書店 1982年
池上嘉彦『詩学と文化記号論』筑摩書房 1983年
川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七と五の詩学—』岩波書店 1991年
川本皓嗣「伝統のなかの短詩型」『歌と詩の系譜』中央公論社 1994年
『新聖書辞典』いのちのことば社 1985年
Peter Milward *Commptation in Plants and Animals* The Hokuseido Press 1994
藤橋文子『翻訳行為と異文化コミュニケーション』松籟社 2007年